

SHOW-HOUSEシネマフルーツ

★★★★★

年少日記 (Time Still Turns The Pages)

2023年／香港映画

配給：クロックワークス／95分

2025（令和7）年6月10日鑑賞

テアトル梅田

Data

2025-53

監督・脚本：卓亦謙（ニック・チエク）

出演：盧鎮業（ロー・ジャンイップ）

／鄭中基（ロナルド・チェン）

／黃梓樂（ショーン・ウォン）

／陳漢娜（ハンナ・チャン）

／何珀廉（カーティス・ホー）

おみどころ

校舎の屋上からの飛び降り自殺は、湊かなえの人気小説を映画化した『告白』（10年）等でおなじみ（？）だが、本作の冒頭もそれ！すると、香港の自殺率は日本のそれ以上！？もっとも、この自殺はホント？それともフェイク？そこらあたりがわからないまま、自殺をほのめかす遺書が発見されると、スクリーン上はがぜんミステリー調に・・・？

そんなやり方もあるが、台湾の若手ニック・チエク監督のデビュー作は、そんな奇をてらうことなく、一気に回想シーンに！学校の成績もピアノも優秀な弟と出来の悪い兄の設定は、現実の私と兄の姿と真逆だが、本作に見る劣等感いっぱいの兄の生きザマ（死にザマ）は？すると主人公の高校教師はダレ？

自殺はダメ！それはわかっているが、

それが避けられないのが現実！そんな問題意識を持って、本作をしっかり検証したい。

————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * —————

■監督デビュー作で快挙！教師としての体験を元に脚本を■

1980年代後半、中国第5世代監督たる張芸謀（チャン・イーモウ）の『紅いコーリヤン』（87年）と陳凱歌（チェン・カイコー）の『黄色い大地』（84年）が世界に発信されるまでは、中国映画（中華映画）といえばイコール香港映画だった。それは、「一国二制度」という特殊な時代状況のもとで、香港だけが世界に門戸が開かれ、一定の自由を持っていたからだ。ところが、香港で自由化、民主化を求める運動が強まるとともに、その抑圧、弾圧が強まったため、2025年の今は、あれほど活況を呈していた香港の映画界は死の寸前！？私はそう思っていたが、いやいや、さにあらず！卓亦謙（ニック・チエク）監督のデビュー作たる本作は、中華版アカデミー賞と言われる第60回金馬獎で観客賞と最優秀新

人監督賞を、第17回アジア・フィルム・アワードで最優秀新人監督賞を受賞！そして、第36回東京国際映画祭の上映時、多くの顧客から「今年のベスト」「涙が止まらない」と称賛の声があがったそうだから、すごい。

本作冒頭、(学校の) (校舎の) 階段が写し出され、続いて校舎の屋上のフェンスに1人で立つ少年の姿が！こりやヤバイ！そう思った瞬間、少年はフェンスを越えてジャンプ！すると・・・？これは、湊かなえ原作の人気小説『告白』を中島哲也監督が映画化した『告白』(10年) (『シネマ25』51頁) をはじめ、「自殺モノ」映画でたびたび出てくるシーン！？誰もがそう思ったはずだが・・・。

ニック・チェク監督がデビュー作のテーマに「自殺」を選んだのは、映画を学んでいた大学時代に飛び降り自殺で友人を失った経験から、らしい。それから10年以上経過した今、「一国二制度」や民主主義を巡る香港の政治、経済、社会問題は深刻になるばかりだし、若者の自殺も増大、しかも低年齢化が進んでいる。そこで、ニック・チェク監督はデビュー作にそんな“自殺”に関する問題意識で一举に投入したわけだ。なるほど、なるほど・・・。

■□■自殺をほのめかす遺書を発見！その文章は何と！？■□■

ドナルド・トランプ氏が大統領に就任し、「トランプ2.0」が始まったのは、2025年1／20。それから「100日間のハネムーン期間」が過ぎ、人気が低下気味の中、6／14にはトランプ大統領の誕生日祝いを兼ねた「大規模な軍事パレード」が実施されるそうだから、ヤバイ。彼はプーチン大統領や習近平国家主席と同じような、独裁者(王サマ)を本気で目指しているの？他方、MAGA (Make America Great Again) は、彼が大統領選挙で勝利するための良くも悪くも大切な「合言葉(キーワード)」だったが、近時、トランプ関税をめぐる協議が各国との間でズルズルと続いている中、TACO (Trump Always Chickens Out) という言葉が流行っているのを、あなたは知っている？この言葉についてトランプは「私が尻込みする？聞いたことがない。その発言は絶対に口にするな。最も不快な質問だ」と語っているそうだが、それは一体なぜ？

それはともかく、本作冒頭の屋上から飛び降りた少年は、次の瞬間、地上ではなく屋上の外床のスペースに立っていたから、一安心！するとこの少年も、「私は何よりも関税を愛する」と公言し、自らを「タウフマン」と称するトランプ大統領が、常に高めの(釣り)球を投げ込む“トランプ流交渉術”的実践者？

他方、いかにも高校教師向き(?)の雰囲気いっぱいのチェン・ヤウジョン(盧鎮業(ロー・ジャンイップ))の学校では、本当に生徒の飛び降り自殺事件が発生したらしい。その男の子は、それまでいじめられていたグループの男の子の1人に怪我を負わせた上、1人で屋上から飛び降りたようだが、その直後に自殺をほのめかす遺書が、ゴミ集めの中で発見されたからビックリ。そこでチェン・ヤウジョンがさらにビックリさせられたのは、その遺書の中に「僕は、どうでもいい存在だ」と書かれていたこと。この言葉は、何と幼少期のチェン・ヤウジョンが自分の日記に綴っていた文章と、全く同じだったのだ。これは

一体どういうこと？

■□■兄と弟の成績の違いは？父親の対応は？■□■

本作が面白いのは、チェン・ヤウジョンが遺書の文章に驚いた直後、スクリーンが突如、チェン・ヤウジョンの幼少時代にタイムスリップしていくこと。いやはや、映画は何とも便利な芸術だ。2人兄弟の一方が成績もピアノも優秀で、一方がダメという設定と、体罰も辞さない厳格な父親、そして、2人の子どもに愛情を注ぎながら父親の言う通りに従わなければならぬ母親、という本作の設定は興味深い。なぜ、それが私の興味をそそったかというと、それは兄と弟の立場こそ正反対だが、その設定が、松山で育った私の中・高時代と全く同じだったからだ。

小学校6年生までは勉強だけではなく、音楽もスポーツもトップクラスだった私だったが、1年先に兄が入学した愛光学園という中高一貫の進学校に入ると、数学、物理、化学がサッパリわからず、成績は低迷！出来の悪い弟は、両親や教師はもちろん、周りのみんなから常に10位以内に入っている兄と比べられて、肩身の狭い思いをすることになった。本作の厳格な父親は裕福な弁護士だが、我が家は貧乏だったし、本作の父親ほどの手厳しい体罰と厳しい言葉はなかったが、それは程度の問題だから、弟としての兄に対する劣等感は大きかった。そんな中でも、私は映画や将棋やラジオ等に“逃げ道”を見つけていたし、高2からはそれなりに大学の受験勉強に精を出して大阪大学法學部に入学することができた。

しかし、学校の成績もピアノも弟に比べて明らかに出来の悪い本作の兄チェン・ヤウギッ（黄梓樂（ショーン・ウォン））はとことん追いかけていく中で、逆に自殺を考えることになったようだからヤバイ。すると、本作冒頭のシーンは、どこまでがホント？どこまでが作り話・・・？

■□■香港の子供への抑圧は？中国・日本・韓国と比べると？■□■

現在では、日本、韓国はもちろん、中国でも少子高齢化が進んでいます。しかし、私が生まれた1949年は戦後の“ベビーブーム”だったから、生まれながらにして競争相手が多くなった。そのため、“団塊世代”というネーミングまで頂戴したが、1クラス50名という構成は今では考えられないものだ。私の中・高6年間の大学受験競争はかなり過酷だったから当然プレッシャーもあったが、幸いにして自殺を考えたことは一度もなかった。

それに対して、1981年生まれのニック・チェク監督が本作を作ろうと思ったきっかけは、近年の香港における学生の自殺問題だったそうだから、経済的に豊かになり、少子高齢化が進む昨今、（香港）社会の、子どもへの抑圧は一体どうなっているの？もちろん、少子高齢化は日本でも韓国でも深刻化しているし、人口増を抑えるため一時は“一人っ子政策”を取った中国でも今はそれが進んでいるが、それとともに子どもへの抑圧問題やそれに伴う子どもの自殺増加問題も深刻化している。

しかし、それは一体なぜ？私は日本人だから、日本における子どもへの抑圧の実態は理



解できるが、香港におけるそれはどうなっているの？その実態の1つは、幼少時代あれほど成績の良かった弟のチェン・ヤウジョンが大人になった今、(たかだか)高校教師になっていることからも読み取ることができる。つまり、父親は裕福な弁護士だったにもかかわらず、出来の悪い兄はもちろん、優秀だった弟ですらそれを継ぐことはできず、しがない(?)安月給の(?)高校教師になっている(にしかなっていない)という実態だ。

ストーリー上それがわかるのは本作中盤からだが、パンフレットに収録されているニック・チェク監督インタビューによると、「成長した主人公は実は弟だという設定」は当初の脚本にはなく、当初は「辛い幼少期を過ごすけれど大人になって遺書を見つけ、かつての自分を思い出すというシンプルな物語」だったらしい。また、「もっと深堀りして問題提起できるのではないかと考え、兄弟で比較される悲しさや兄が死んでしまった後の弟はどう生きるのかが気になりました。このひねりは、ある種商業的な映画の要素とも考えられるので葛藤もありましたが、残された人の立場も問題を語る上で大事な視点だと思って描くことを決めました。」とも語っている。しかして、その成否は？

■□■2人の子役、ショーン(兄) VS カーティス(弟)に注目！■□■

本作の主役である高校教師チェン役を演じたロー・ジャンイップはニック・チェク監督の大学の1年先輩で、同じ授業も取っており、頼れるリーダー的な存在だったらしい。したがって、本作では全編を通じて、そんな彼がストーリーを牽引しているが、本作で目立つのは回想シーンに入った途端に子役として登場するショーン(兄役)、カーティス(弟役)の存在感と演技力だ。どんなに演技の上手い俳優でも子役には勝てないことを本作でも実感！

監督インタビューの中でニック・チェク監督は、「ショーンは上手く感情を表現するトニー・レオントタイプで、カーティスはセットに色んな人がいても自分の演技を貫くアンディ・ラウタイプだと思いました。」と語っている。日本人の観客にトニー・レオンとアンディ・ラウの異同がどこまで理解できるのかはともかく、そんなニック・チェク監督の言葉の意味については、あなた自身の目でしっかりと！

2025(令和7)年6月20日記